

あとがき（『宮本百合子選集』第七巻）

宮本百合子

青空文庫

暗くしめつばい一つの穴ぐらがある。その穴ぐらの底に一つの丸い樽がころがされてあつた。その樽は何年もの間、人目から遮断されたその暗がりところがされていて、いそがしく右往左往する人々は、その穴ぐらをふさいでいる厚板の上をふんで歩いていながら、その足の下にそんな樽のあることは心づかなかつた。よしんば、その穴ぐらや樽について知っている人があつたにしろ、そのことについては黙っていた。なぜなら人々は、云つていいと許されていることについてしか話せなかつたし、穴ぐらや樽については話してはいけないからこそふたでふさいで暗いところにしておくのであつたから。

ところが、或る夏の日、あたり一帯もの凄いい音響がして、やがて死んだようにしんとなつた。しばらくして、その森閑とした大氣のどこかしらから人声がきこえて来た。かすかだった人声は次第にたかまり、やがて早足に歩く蹀音がおこり、やがてかたまって駈けまわるとどろきになつて来た。君たちは、話すことができる！ 君たちは話すことができる！

そういう歓喜の叫びが穴ぐらの底までつたわつて来た。樽は、幾年ぶりかで穴ぐらから外氣の中に運び出された。ほこりをかぶつた樽の栓がぬかれた。樽はむせび鳴りながら自身のなかみをほとばしらせた。日光にきらめき、風にしぶきながら樽からほとばしる液

体は、その樽の上に黒ペンキでおどかすようにかきつけられていたPoison——毒ではなかった。液汁は、芳醇とまではゆかないにせよ、とにかく長年の間くさりもしないで発酵していた葡萄のつゆであつた。

「播州平野」と「風知草」とは、作者が戦争によつて強いられていた五年間の沈黙ののちにかかれ、発表された。主題とすれば、一九三二年以来、作者にとつてもっとも書きたくて、書くことの出来ずにいた主題であつた。この二つの作品は、日本のすべての人々にとつて忘却することのできない治安維持法と戦争のために犠牲とされた理性と善意のために捧げられる。生けると死せるとにかかわらず、この二つの悪虐な力によつて破壊を蒙つた人間性の恢復と未来の勝利のためにささげられる。二つの作品には自然発生的な萌芽として、新しい日本の人民生活の文学の端緒と、現代文学が私小説から脱却してゆく可能の方向及びこれからの日本文学が実質的に世界文学の領野に参加し、そこで becoming ゆくべき現実の性格などについて、示唆をふくんでいる。

「播州平野」と「風知草」とは作者にとつて第二の処女作のように思われる。それらがほんとに思わずも溢れる川のように溢れてかかれた作品であり、ほんとに書かずにいられない題材と主題とによつているというまじりけなさの点で、これら二つの作品のかげには、

人生の初秋において妻として甦った一人の女の豊かな秋のみのりへの生と文学への息づきがある。

この二つの作品は一九四七年度の毎日出版文化賞をうけた。

一九四八年九月

〔一九四八年十月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社

1981（昭和56）年5月30日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第2版第1刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「宮本百合子選集 第七巻」安芸書房

1948（昭和23）年10月発行

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2004年2月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あとがき（『宮本百合子選集』第七巻）

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>